

発見!

たからモノ ただみの文化遺産

第9回

ゆるくてかわいいハラノムシたち

『五臓曼荼羅一卷』



負傷した河井継之助を診療し看取った医家矢沢家（只見町塩沢）には、医師巻物が伝来していました（只見町蔵）。総題がないので、巻頭題により書名を『五臓曼荼羅一卷』とします。江戸時代の書写ですが、内容の成立は戦国時代の16世紀と考えられます。『五臓曼荼羅一卷』は東洋医学の医学書で、仏教の五輪（空風火水地）で説く「五臓曼荼羅図」、針と灸のツボを人体に表示した「鍼灸図」と針の打ち方の口伝、人を病気にさせるムシの「九虫形像図」の3部から構成されています。

五臓とは肺臓・心臓・肝臓・脾臓・腎臓です。西洋医学では臓器は個々にはたらくと考えます。しかし、東洋医学では、人体の生命活動は、五臓が相互に関係して統合してはたらき、生理や病理は五臓のはたらきの表れだと考えます。

「九虫形像図」は、人を病気にさせる9つのハラノムシの図です。図の注記にしたがって、右上から順に紹介します。（番号1～9を付しました）

- 1 「尸虫」は小児のような形で、瘦せ病にする。
- 2 「肺虫」は人に津液（体液）で満たす。
- 3 「黄虫」は人を肥満にする。
- 4 「寸白虫」は血を食い、陰に衰えさせる。
- 5 「蝮虫」は人の顔を黄色くする。
- 6 「蟻（蟻）虫」は人をハンセン病にする。
- 7 「内虫」は人を食う。
- 8 「男虫」は人を気虚（無気力）にする。
- 9 「悪虫」は人に張りつき、胸を病ませる。

戦国時代から江戸時代の人々は、ゆるくてかわいいムシたちが、病気の原因だと考えました。現代でもハラノムシがおさまらない、ムシのいどころが悪いと言いますが、こんなムシのせいだったのです。病気に対する考え方がわかる資料です。

戦国時代の63種のハラノムシの図鑑として有名な、永禄11年（1568）『針聞書』（九州国立博物館蔵）があります。『針聞書』と『五臓曼荼羅一卷』は、構成が似ており、ムシの図と注記に共通のものがあります。『針聞書』と同じ系統の医学書は、九州大学に18種のムシの図の書物があり、只見のものが3例目となります。医学史上稀少で重要な資料が、只見に存在しています。

文・写真：久野俊彦



ただみ・モノとくらしのミュージアム 展示情報

入館無料

ミニテーマ展「民具の聖地 只見」一民具の造形

会期：2023年11月14日(火)～2024年1月8日(月・祝)

場所：ただみ・モノとくらしのミュージアム 展示ホール